様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０２９０３

研究課題名（和文）軽中等度難聴児の学童期課題の発生の機序と言語発達支援要件の検討に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Mechanisms of Developmental Problems in School-aged Children with Mild to Moderate Hearing loss and Support for Language Development

研究代表者
廣田　栄子（Hirota, Eiko）

筑波大学・人間系・名誉教授

研究者番号：３０２７５７８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：インクルーシブ教育環境で生活する軽中等度難聴（MMHL）児と人工内耳装用（CI）児は、騒音環境下にあり、学習や活動場面で、恒常的に聴取の不全感が生じている。そこで,本研究では、(1)学校生活の質を評価する尺度の開発、(2)幼児期後期に残る言語発達障害の評価方法の作成、(3)軽度難聴によるMMHLの青年期に生じる障害や困難、(4)難聴と診断された後の早期介入を担う保護者への支援問題、という4つの課題を分析した。その結果、難聴の早期診断・早期治療のためのガイドライン（EHDI:1-3-6 plan）に基づき、MMHL児に対する切れ目のない長期的な支援の要件が明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
MMHL児では補聴下にも環境音や音声を概ね聴取できるが、偶発的な会話や就学前の高次な言語学習に影響を及ぼし、高度難聴児と同様の言語発達支援課題を有することが明らかとなった。幼児期後期に残る言語遅滞については、「ナラティブ発達評価」、学童期のコミュニケーション障害による社会的関係性の遅滞については「学校生活QOL尺度」を開発し、MMHL児への適応の有効性が示された．MMHLにより、幼児期には会話知識と語用の精緻化、さらに青年期には傾聴努力や聞こえの困難感により障害開示や自己受容等の心理社会的な影響が生じ、障害理解とセルフアドボカシー形成など高度難聴児と同様の長期的支援の有用性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：　Children with mild-moderate hearing loss (MMHL) and cochlear implanted children living in inclusive educational settings are in noisy environments and constantly experience hearing deficits in learning and activity settings. In this study, we analyzed four issues: (1) the development of a scale to assess the quality of school life, (2) the creation of a method to assess language developmental disorders that remain in late childhood, (3) the obstacles and difficulties that occur in adolescents with MMHL due to mild hearing loss, and (4) support issues for parents responsible for early intervention after hearing loss has been diagnosed.　As a result, the requirements for seamless long-term support for children with MMHL were clarified based on the guidelines for early hearing detection and intervention program (EHDI:1-3-6 program).

研究分野：言語聴覚障害学

キーワード：軽中等度難聴児　人工内耳装用児　学校適応　学校生活QOL尺度　幼児期後期言語発達　障害理解の自己価値　保護者支援　新生児聴覚スクリーニング

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

わが国に新生児聴覚スクリーニング検査（NHS）が導入されて 24 年が経過し,公的な受検費用補助に地域差があるものの全国的な普及をみた（91%, 日耳鼻）. NHS 検査音が 30～40dBHL のため, 軽中等度難聴（Mild and Moderate Hearing Loss: MMHL, 26～69dB)が乳児期の早期に診断されている.

MMHL 児は NHS 後の難聴診断児の 50%（米国 National CDC）～58.6%（英国）を占め,NHS 後の早期介入が言語発達に影響することについて国際的同意がある（EHDI 2019）. しかし,高度難聴児のように発達への影響が顕著でないことから,学童期以降の課題と支援要件について看過される傾向がある（Tharpe2008）.

しかし, 就学後には学校内で騒音環境下にあり, 学習場面での音声や学習情報を聴取することに障害が生じている. また, 恒常的に会話や情報収集に不全感を抱くなど, 心理社会的側面での課題が学校生活への参加を妨げる事態も生じ, MMHL 児の個別状況を評価し必要な支援の検討が要請される.

しかしながら, 国内では MMHL 児の社会的活動と参加への影響についての検討は乏しく, 聴力閾値レベルや語音明瞭度によって, 個別状況を推察するにとどまっている. そこで著者らは, 地域小学校に通う MMH 児の学校生活について包括的に調査し. さらにこのような課題は, 25～30dB と軽度難聴程度の装用閾値を示す人工内耳装用児（CI 児）に共通する点が多く, 学校適応上の実態, 課題発生の機序の解明と支援の在り方について検討した.

2. 研究の目的

インクルーシブ教育環境で生活する軽中等度難聴（MMHL）児と人工内耳装用（CI）児は, 生活騒音環境下に, 恒常的に学習・活動情報の聴取に不全感が生じている. そこで,本研究では, このような状況での MMHL 児の(1)学校生活の質を評価する尺度を開発し, さらに, 就学後の学習に影響を及ぼすと考えられる(2)幼児期後期に残る言語発達障害の評価方法を作成する. その上で, (3)MMHL 児の青年期に残存する聞こえの障害や心理社会的困難について調査し, (4)難聴診断後の早期介入を担う保護者への支援問題という 4 つの課題について検討し, MMHL児の課題発生の機序の解明と, 早期診断・療育のガイドライン（EHDI 1－3－6plan：NHS-診断・介入）を踏まえた,MMHL 児に対する切れ目のない長期的な支援の要件について明らかにすることを目的とする.

3. 研究の方法

（1）研究1：MMHL 児の学童期課題；学校生活 QOL 尺度の開発

著者らは先行研究にて MMHL 児の学校生生活上の課題と,「学校生活充実度」について「21 世紀型学力モデル」（藤沢他,2008）を参照した難聴児向け質問項目を作成し,全国聴覚特別支援学級在籍児 3 年～6 年生 328 名について調査した. 回答の因子分析により 6 因子を抽出し MMHL 児に生じる課題と抽出した因子との関連性について検討した. 本研究では同知見に基づいて,MMHL 児の学校生活 QOL の改善をはかる尺度（学校生活 QOL 尺度）を作成し,2 名の研究者により項目の内容妥当性を検討した。対照群として聴力正常児(3 年～6 年生)260 名（各学年 60 名）について,その母親を対象とした web 調査を実施した（35 項目）. 当該児童と話し合いの上,質問項目に対して 5 肢択一で回答を求め,上位2択の回答割合を算出した. また, 難聴児調査結果から該当項目を抽出し, 聴力別難聴児群（軽度 HH,中等度 HH,CI 装用,高度 HH）間で比較して MMHL 児の特徴と共通性について解析し, 学童期の学校生活 QOL 課題について解析して, 支援の在り方について検討した.

（2）研究2：幼児期後期の言語発達状況の評価

<u>2-1)会話時の他者の視点取得</u>

就学前後期の MMHL 児(4～7 歳)27例について,会話時の他児の立場を背景とした感情視点を推測する課題（視点取得課題1）と,社会的公準（約束）の理解を背景とした感情的視点取得の課題（視点取得課題Ⅱ）を実施した. 同場面の設定を図版で示し,設問への自由な回答を求めて発話の文意を分類して正誤を検討した. 聴力正常児（34 名,51名）と比べて発達を検討した. なお,課題Ⅰでは,同場面で自身に生じる感情視点（自己準拠反応）から,話し手の立場の理解による推測（他者準拠反応）への回答の変化を発達とした. また, 課題Ⅱでは,対象児が母親と以前にした約束を違える葛藤状況に遭遇した際に,約束による制約を意識した視点への変化を発達とした. 幼児期後期の他者の視点取得について解析した. 併せて,会話形式・語用などのコミュニケーション領域（CCC-2）について保護者による評価調査を行った.

<u>2-2)ナラティブ発達評価法の開発</u>

ナラティブは,幼児期に時系列または事象を意味的につなげて内容豊かに語る発話として,定型発達では 3 歳頃から体験叙述で発現し,幼児期後期に徐々に精密度が増す. 学童期の作文に繋がる重要な音声言語発達の里程標とされる. 本研究ではハイポイント法（MacCabe,1997）を参照してストーリー展開を設定した 4 枚図版を作成し,「産生・再生・模倣」の 3 モードで叙述を求め,評価基準を作成して,聴力正常児と聴覚障害児の年長幼児から学童期高学年児に実施した. 発達評価として回答モード（(理解・リテル・産生)）,評価の構成要素（(行為,順序,場面,クライマックス)による,ストーリー構成の能力評価を設定し,分析評価視点と基準の有用性について検証した.

(3) 研究3： MMHL 青年期課題と保護者支援

3-1) MMHL 青年当事者の障害理解と支援

MMHL 大学生 7 名,人工内耳装用(CI)学生 8 名と高度難聴(SHL)学生 3 名に対し web 質問紙調査を実施した. 音声と環境音認知の自己評価(The SSQ12:the Speech, Spatial and Qualities of Hearing scale, Noble,W.,et al, 2013),および,心理社会的尺度評価,自己受容･他者受容尺度(上村,2007)計 84 項目を作成し,青年期の MMHL による外界聴取と課題,および心理過程について解析した.

(4)研究4:保護者支援:難聴診断後の保護者支援

大学病院にて NHS 後に乳児期から医療･管理を行った MMHL 児(1～6歳)の保護者 15 名を対象に,診断時～療育通所時に遭遇した課題と,心理的回復過程について後方視的評価により調査した. 保護者の心理的ストレスと経緯,聴覚障害の認識など心理的回復の経緯についての記述に基づき質的に検討し,保護者の心理的変遷を概念化した. さらに難聴診断時と調査実施時の心理的ストレス状況評価(Edinburgh Postnatal Depression Scale(EPDS,Cox1987 日本版)を用いて比較し,変容に関連する要因について検討した.

4. 研究成果

(1) 研究1:MMHL 児の学童期課題;学校生活 QOL 尺度の開発

調査対象とした聴力正常幼児 260 名の保護者(平均年齢 41 歳)については,属性として,学歴は 9～12 年:26.7%,13～16 年<:70.4%,17 年<:2.9%であった. 61.3%が就労(内 22%:常勤)し,全例が家族と同居し,85%で対象児の姉弟が同居していた.

調査項目のうち信頼係数(α係数)0.8 以上の 28 項目を採用し,カテゴリ分析により 7カテゴリを生成し(Ⅰ:充実感,Ⅱ:満足感,Ⅲ:社会的スキル,Ⅳ:コミュニケーション能力,Ⅴ:社会共生的態度,Ⅵ:自律的態度,Ⅵ: 自己価値),学校生活 QOL 尺度を作成した(Tab.1:Ⅰ～Ⅶの項目).

カテゴリ毎に,聴力正常群と難聴児群4群間の結果を比較した(Fig.1). その結果,MMHL 群は,聴力正常群と比べ,Ⅰ～Ⅲ.Ⅳカテゴリで差はないもののⅣ,Ⅴ,Ⅶカテゴリで低下を示し(p<.05),個別に支援を検討すべき領域と考えた.

難聴児群4群間(軽度･中等度･高度･CI)に差はなく,

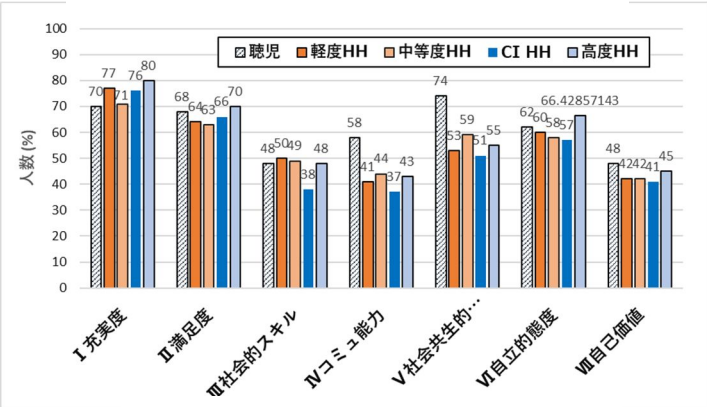
MMHL 児においても高度難聴児と同様のコミュニケーション･社会性･自律的態度･心理的成長の支援が必要といえる. とくに障害の自覚や障害開示 自己権利擁護, 将来への展望など,自己価値の形成に重要な要素といえる.

また,国語成績について平均的分布(21～79%)に, 80～85%の MMHL 学童が該当し平均的範囲の成績を示した(**Tab.2**).

【Tab.2 国語成績】

	N	国語成績,該当児割合(%) 20%>	21~ 79%	80%<
聴 児	260	8.8	49.6	41.7
軽度HH	54	7.4	85.2	7.4
中等度HH	115	13	80.1	6.1
CI HH	107	11.2	70.1	18.7
高度HH	32	21.9	59.4	18.8
小計、HH	308	12.3	75.6	12.1
合計	568			

【Fig.1 学校生活ＱＯＬ尺度;評価結果】



【Tab.1 学校生活 QOL 尺度】

領域	設問項目
Ⅰ充実感	1.学校が楽しいと感じている
	2.学校では精神的にリラックスしている
	3.学校では好きな活動や勉強をしていると感じている
Ⅱ満足感	4.学校の先生の授業は分かりやすいと感じている
	5.自分の得意な科目をもっと勉強したいと感じている
	6.学校の行事（運動会等）の後、精一杯やれたと感じていた
	7.自分には一緒に行動して〈れ話し合える友達がいると思っている
Ⅲ社会的スキル	8.いつも新しいアイデアを考えたり工夫する
	9.調べて分かったことを元に自分の考えをもつことができる
	10.TVのニュースや新聞で最近の社会の出来事を知っている
Ⅳコミュニケーション	11.自分の考えや意見を相手に分かりやす〈伝えることができる
	12.遊んでいる時やクラスで積極的に自分の意見を言うことができる
	13.周囲に対して遠慮する表現（言葉やジャスチャー）ができる
	14.友達の気持ちや話しを正し〈理解しようとしている
Ⅴ社会共生的態度	15.友達一人一人の良い所を探そうとしている
	16.意見の違う人とも協力し合うことができる
	17.いつも遊んだりおしゃべりする仲の良い友達が2～3人いる
	18.友達が困っているときに助けることができる
Ⅵ自律的態度	19.自分がやらなければいけない事は最後までやり抜〈ようにしている
	20.自分の要求が通らな〈てもカッとなったりせずに我慢する
	21.したり注意力を持続する時間が短い
	22.出された課題や役割はきちんとこなしている
Ⅶ自己価値	23.自分にできることや向いていることが何かを知っている
	24.つきたい仕事や夢を持っている
	25.失敗を恐れたり、自信がないと感じている(反転項目)
	26.自分の弱み(難聴)を自覚したり気にしている（反転項目）
	27.自分の弱み(難聴)についても友達に話している
	28.分らない事や聞こえない時に友達/先生に聞〈等して解決している

(2) 研究2:就学前後期の言語発達課題

2-1) 会話時の他者の視点取得

会話時には,対話者の立場や会話の文脈から発話内容を推測し,暗示下の意図や制約を考えて的確な理解に至る. 円滑に会話を理解する MMHL 児では,これらのメタ言語的な情報処理については, 6～7歳と遅れた. また,事前の母親との約束によって,会話理解が制約される場面でも同様の発達を示した. 聴力正常児では,5 歳児に概ね他者準拠理解をしたものの,MMHL 児では,推測を左右する条件が重なると,理解が困難になった. 語用的判断が低下した(CCC-2).

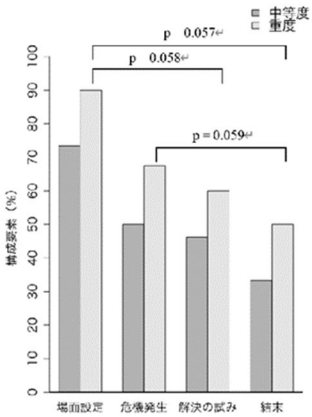
MMHL 児の幼児期後期の遅れは,学童期以降に向上がみられた. 日常会話理解のレベルにとどまらずに,暗示下の発話内容への洞察力等幼児期後期の言語課題についての支援の必要性が示唆された.

2-2) ナラティブ発達評価法の開発

ナラティブ評価バッテリー素材と評価段階と基準,および各段階におけるナラティブの構成要素を解析して開発し(マクロ分析), 発達的変化を明らかにした. 連続図版についてのマクロ構造の語りは初期に短いセリフで構成したが高年齢児で直接話法や間接話法が採用された. ミクロ構造の結束性は発達的に徐々に向上し,MMHL 児では構成要素としての異なり語彙数が低下した. 学童期にハイポイント法の構成要素が揃うことで,効果的なストーリー構成が示せるが,「結果と評価」要素の産生が低下し,物語の結末部の締めくくりに課題を残した(Fig2.) .MMHL 群では幼児期から一貫した言語指導を受けた重度群よりナラティブの構成要素の使用は減少し,ナラティブ発達の充実についての経過支援の必要性を指摘した.

MMHL 児評価では,ミクロ構造ではナラティブ構成要素と文・句の意味的一貫性について,マクロ構造では,文内の意味的結束性の発達と課題を分析し,ストーリーの結末部に向けたまとまりの意識化の評価が重要になる. 幼児期早期からの会話指導に取り入れる重要性が示唆された.

【Fig. 2. マクロ分析】



(3) 研究3:MMHL 青年期課題

3-1) MMHL 青年当事者の障害理解と支援

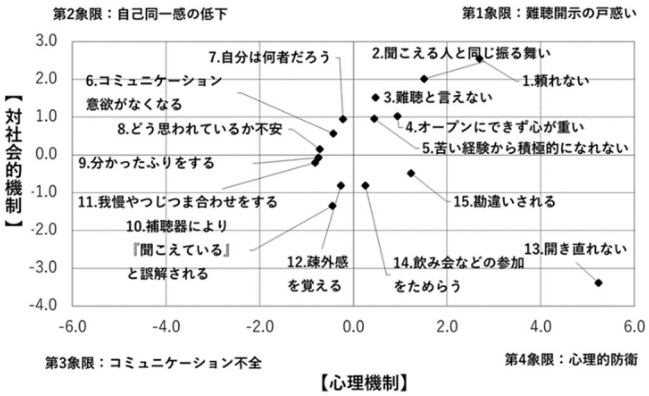
MMHL 学生の聴取能では,CI 学生と比べ音声や戸外の音が聞こえず困難感を増し,傾聴努力の自己評価は増加を示した(SSQ12). 心理社会的には,難聴開示の戸惑い,自己同一感の低下,コミュニケーション不全,心理的防衛の4象限に困難感は布置した(Fig3. 数量化III類) .MMHL 学生は難聴開示に心理的負荷が高く(p<. 01) ,自己受容評価が低いほど聞こえの主観的困難感を有した(p<.05) .

(4) 第4研究:難聴診断後の保護者支援

・質的検討では,NHS 要再検後に,保護者は難聴診断に対して受け入れがたい気持ちをもちながら, 療育や同障家族との交流を経て,前向きに受け止める経緯が示された.

将来への不安と往来するなど,当事者視点での知見を得た(Fig.4) . 難聴診断初期のうつ状況(EPDS 値)は,療育時に低下した. 個別属性(難聴程度・出産経験・就労など)との関連性は認められず,MMHL 児の保護者に共通する傾向と推測された.

【Fig.3 青年期心理社会的困難



研究成果の考察

・本研究では, MMHL 児では補聴器装用下に 環境音や音声を概ね聴取可能であるが, 偶発的な言語学習と就学前までに習得する高次な

言語学習に影響を及ぼし. 幼児期には会話知識と語用の精緻化など, 高度難聴児と同様の言語発達支援課題を有することが明らかとなった.

・幼児期後期に残る言語遅滞については,「ナラティブ発達評価」, 学童期のコミュニケーション障害による社会的関係性の遅滞については「学校生活 QOL 尺度」を開発し, MMHL 児への適応の有効性が示された.

・MMHL 児の学童期には, コミュニケーション障害が継続することに伴い,社会的関係性の学習と関連知識獲得の制約が生じていることが示された.

・課題発生の機序には, 幼児期から学童期にかけて, 言語・会話知識と語用的側面での精緻化に制

【Fig.4 NHS から療育:保護者の心理的経緯】

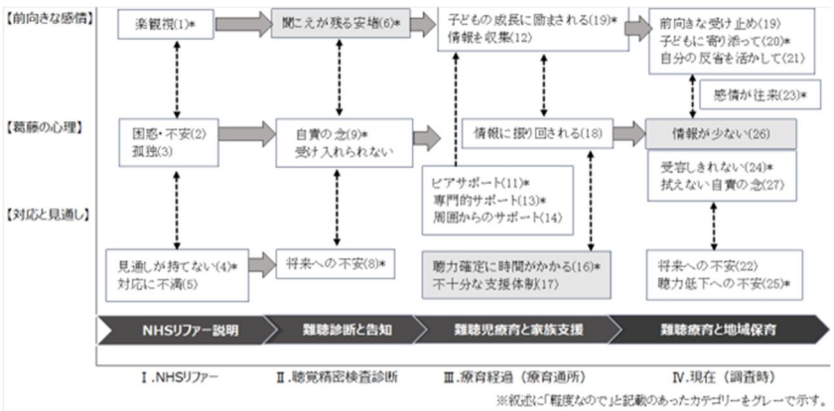


図1 NHSリファー時から現在に至るまでの保護者の心理過程(概念図)

約が生じて，高次の言語発達についての影響が生じていることが考えられた．言語発達支援の要件として，ナラティブ発話では，文や句，文内の意味的一貫性･連結性について，また，会話では他者の立場で発話文脈を理解するような豊かな育ちに課題を生じる可能性が示唆される．本研究で開発した 2 種の発達評価基準を採用し一貫した指導が重要といえる．
･さらに MMHL により，青年期には傾聴努力や聞こえの困難感により障害開示や自己受容等の心理社会的な影響が生じ，障害理解とセルフアドボカシー形成などの支援の有用性が示唆された．MMHL 児の幼児･学童期･青年期には，自身の障害の理解と権利擁護の意識を形成し，学校等社会参加への際の QOL 向上の視点での経験の蓄積が重要であり，高度難聴児と同様の長期的支援課題を有するものと示唆された．
･難聴診断後から療育の経緯で保護者のストレス状態は,高度難聴児の保護者と同様の経緯を示した．出産後の疲労と育児に障害告知が重なり,同時期の NHS 受検後から耳鼻咽喉科受診までの母子保健に関わる専門職との連携や養育･療育支援の円滑な地域体制の構築が有効と考えられた．

【結論】
　本研究では，EHDI-plan（2019）を踏まえた軽中等度難聴児に対する，診断から青年期までの切れ目のない長期的な支援の重要性を指摘した.支援の際に必要となる学童期の学校生活 QOL に関する尺度，および，就学前の言語発達課題についての評価法を開発し,MMHL 児の学校適応上の課題発生の機序と支援運用上の要件について明らかにした．NHS により乳児期早期に軽中等度難聴と診断された MMHL 児に対しては，高度難聴児と同様に言語社会的発達の経過を観察し,適時に必要な介入や保護者への養育上の助言を行うことが有用との結論を得た。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計18件（うち査読付論文　13件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　16件）

１．著者名 野原 信，廣田 栄子，仲野 敦子，有本 友季子，猪野 真純，奥沢　忍	４．巻 66(5)
２．論文標題 就学前後の軽中等度難聴児における他者感情推測の検討：社会的な制約（約束）の理解	５．発行年 2023年
３．雑誌名 AUDIOLOGY JAPAN	６．最初と最後の頁 471-471
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4295/audiology.66.471	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中津真美	４．巻 24(2)
２．論文標題 障害学生支援における実践的視座からの現状と課題：組織体制面を中心に	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本リハビリテーション連携科学	６．最初と最後の頁 64-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 岡野由実	４．巻 66(5)
２．論文標題 一側性難聴による障害の実態と支援	５．発行年 2023年
３．雑誌名 AUDIOLOGY JAPAN	６．最初と最後の頁 296－296
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4295/audiology.66.296	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 菅野桃花、長井今日子、廣田栄子他	４．巻 66(5)
２．論文標題 当院における新生児聴覚スクリーニング受検後の精密聴覚検査と難聴診断・療育	５．発行年 2023年
３．雑誌名 AUDIOLOGY JAPAN	６．最初と最後の頁 346－346
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4295/audiology.66.346	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 廣田栄子	4．巻 13(1)
2．論文標題 軽中等度難聴児の言語発達支援と聴覚ケア	5．発行年 2022年
3．雑誌名 子どもの発達支援を考えるSTの会会報	6．最初と最後の頁 81-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 廣田栄子	4．巻 23(1)
2．論文標題 ろう／難聴児者のコミュニケーションバリアと支援: わが国および海外の動向と展望,	5．発行年 2022年
3．雑誌名 リハビリテーション連携科学	6．最初と最後の頁 3-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34507/reharenkei.23.1_3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Shigehiro Oohara, Eiko Hirota, Tomomi Oohara	4．巻 121
2．論文標題 Development of Macro-Structure in Written Narratives of Students who are Deaf or Hard of Hearing: Elucidating the Developmental Sequences of High-Point Analysis Components	5．発行年 2022年
3．雑誌名 THE VOLTA REVIEW	6．最初と最後の頁 2-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.17955/tvr.121.1.2.820	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中津真美, 廣田栄子	4．巻 65(2)
2．論文標題 軽度・中等度難聴と人工内耳装用者における聞こえと心理社会的状況の主観的評価：高等教育機関学生の検討	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Audiology Japan	6．最初と最後の頁 113‐121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4295/audiology.65.113	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 野原　信，　廣田栄子	4．巻 65(2)
2．論文標題 就学前後期における軽中等度難聴児の言語発達と他者感情の推測能力の検討.	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Audiology Japan	6．最初と最後の頁 134-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4295/audiology.65.134	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大原重洋，　廣田栄子，　大原朋美	4．巻 65(2)
2．論文標題 中等度難聴児におけるナラティブ構成の特徴と関連要因の検討	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Audiology Japan	6．最初と最後の頁 122‐133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4295/audiology.65.122	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 岡野由実，廣田栄子	4．巻 39(2)
2．論文標題 一側性難聴による聞こえの障害場面の発達的変容に関する検討	5．発行年 2022年
3．雑誌名 コミュニケーション障害学	6．最初と最後の頁 74-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 廣田栄子	4．巻 265
2．論文標題 難聴によるコミュニケーションのバリアと多様性の動向	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ENTONI　(MB ENT)	6．最初と最後の頁 7-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大原 重洋、大原 朋美、廣田 栄子	４．巻 64(5)
２．論文標題 中等度難聴児におけるナラティブ構成の特徴と補聴開始月齢等の関連要因の検討	５．発行年 2021年
３．雑誌名 AUDIOLOGY JAPAN	６．最初と最後の頁 355～355
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4295/audiology.64.355	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中津真美	４．巻 138
２．論文標題 聴覚障害の親をもつ聞こえる子どもの自助グループにおける取り組み.	５．発行年 2020年
３．雑誌名 社会福祉研究	６．最初と最後の頁 77-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 廣田　栄子	４．巻 35(8)
２．論文標題 先天性高度難聴児に対する補聴器と聴覚活用	５．発行年 2019年
３．雑誌名 JHONS	６．最初と最後の頁 929-932
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 廣田　栄子	４．巻 43
２．論文標題 小児の人工内耳と補聴器による言語発達	５．発行年 2019年
３．雑誌名 埼耳鼻会報	６．最初と最後の頁 13-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 菅原 充範，廣田 栄子	4．巻 63(2)
2．論文標題 聴覚障害幼児の言語発達に関する横断的検討：特別支援学校(聴覚障害)全国調査	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Audiology Japan	6．最初と最後の頁 117-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大原 重洋， 廣田 栄子， 大原　朋美	4．巻 63(3)
2．論文標題 インクルーシブ環境における聴覚障害児の聞こえの困難と，無線補聴システムの効果に関する検討.	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Audiology Japan	6．最初と最後の頁 inpress
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計28件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 野原 信，廣田 栄子，仲野 敦子他
2．発表標題 就学前後の軽中等度難聴児における他者感情推測の検討：社会的な制約（約束）の理解.
3．学会等名 第68回日本聴覚医学会・学術講演会
4．発表年 2023年

1．発表者名 Shigehiro Oohara, Tomomi Oohara, Eiko Hirota
2．発表標題 Hearing aid fitting protocols for children using audibility assessment via Japanese sounds.
3．学会等名 The 32nd World Congress of the IALP: Auckland, 20 to 24 August 2023.（国際学会）
4．発表年 2023年

１．発表者名 大原重洋，佐藤綾華，廣田栄子
２．発表標題 小児のナラティブ産出におけるマクロ・ミクロ構造の発達変化と、聴覚障害児への評価視点の検討
３．学会等名 第68回日本音声言語医学会総会・学術講演会(倉敷市)，2023年10月6日.
４．発表年 2023年

１．発表者名 野原 信，廣田 栄子，仲野 敦子他
２．発表標題 就学前後の軽中等度難聴児における他者感情推測の検討：社会的な制約（約束）の理解
３．学会等名 第68回日本聴覚医学会総会・学術講演会
４．発表年 2023年

１．発表者名 中津真美
２．発表標題 中津真美：障害学生支援における実践的視座からの現状と課題：組織体制面を中心に
３．学会等名 日本リハビリテーション連携科学
４．発表年 2023年

１．発表者名 岡野由実
２．発表標題 一側性難聴による障害の実態と支援
３．学会等名 第68回日本聴覚医学会総会・学術講演会
４．発表年 2023年

１．発表者名 野原 信,廣田 栄子,仲野 敦子,有本 友季子,猪野 真純,奥沢 忍
２．発表標題 軽中等度難聴児の就学前後の言語発達の検討：語用と形式.
３．学会等名 第67回日本聴覚医学会総会・学術講演会
４．発表年 2022年

１．発表者名 大原重洋，大原朋美，廣田栄子
２．発表標題 小児の補聴器適合における語音明瞭度の改善に寄与する閾値上の長時間平均スペクトル；明瞭度指数の検討
３．学会等名 第67回日本聴覚医学会総会・学術講演会
４．発表年 2022年

１．発表者名 岡野由実，廣田栄子，瀬戸由記子
２．発表標題 軽中等度難聴児保護者におけるストレス状態に関する調査
３．学会等名 第67回日本聴覚医学会総会・学術講演会
４．発表年 2022年

１．発表者名 岡野由実，廣田栄子，瀬戸由記子
２．発表標題 軽中等度難聴児保護者の難聴に対する認識と療育態度に関する調査；重度難聴児との比較
３．学会等名 第48回日本コミュニケーション障害学会学術講演会
４．発表年 2022年

１．発表者名 廣田栄子
２．発表標題 難聴児への早期介入及び支援の必要性 ―言語発達の観点からー
３．学会等名 独立行政法人国立特別教育総合研究所（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 大原重洋，大原朋美，廣田栄子
２．発表標題 中等度難聴児におけるナラティブ構成の特徴と補聴開始月齢等の関連要因の検討
３．学会等名 第66回日本聴覚医学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 大原重洋，廣田栄子
２．発表標題 聴覚障害児のナラティブ構成における内容再生法と自発産生法の比較
３．学会等名 第66回日本音声言語医学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 中津真美，廣田栄子
２．発表標題 軽中等度難聴例と人工内耳装用例の聞こえと心理社会的状況に関する主観的評価：高等教育機関学生の検討
３．学会等名 第66回日本聴覚医学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 野原 信，廣田 栄子，仲野 敦子，
２．発表標題 軽中等度難聴児における他者感情の推測能力の発達に関する事例的検討.
３．学会等名 第66回日本聴覚医学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 岡野由実、廣田栄子
２．発表標題 軽中等度難聴児支援における医療機関と療育機関の連携と役割 ―診断期における情報提供に関する保護者満足度調査より―
３．学会等名 日本リハビリテーション連携科学学会第21回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 廣田栄子
２．発表標題 難聴児の早期介入および支援の必要性について
３．学会等名 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所,難聴児の切れ目のない支援体制構築と更なる支援の推進に向けた全国研修会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 野原 信，廣田 栄子
２．発表標題 聴覚障害児における会話相手の視点取得と、感情理解との関連性の検討.
３．学会等名 第65回日本聴覚医学会総会・学術講演会（名古屋市）
４．発表年 2020年

１．発表者名 廣田　栄子,大原　重洋他
２．発表標題 インクルーシブ環境における思春期から青年期の聴覚障害認識の構成について：当事者視点での検討
３．学会等名 第65回日本聴覚医学会総会・学術講演会（名古屋市）
４．発表年 2020年

１．発表者名 大原 重洋，廣田 栄子，大原 朋美
２．発表標題 小児の雑音負荷時語音明瞭度検査における臨床的評価の検討
３．学会等名 第65回日本聴覚医学会総会・学術講演会（名古屋市）
４．発表年 2020年

１．発表者名 大原 重洋,廣田　栄子
２．発表標題 聴覚障害児の書記ナラテイブにおけるハイポイント法によりマクロ構造の発達と構成要素の特徴,
３．学会等名 第65回日本音声言語医学会(名古屋市)
４．発表年 2020年

１．発表者名 廣田 栄子,　大原 重洋,　中津 真美,　野原 信,　岡野 由実
２．発表標題 インクルーシブ教育環境における軽度中等度難聴児の言語発達課題に関する検討
３．学会等名 第64回日本聴覚医学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 廣田 栄子，齋藤 佐和，大沼 直紀他
２．発表標題 わが国における聴覚障害児の早期診断・介入の実態と地域連携
３．学会等名 リハビリテーション連携科学学会第20回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 廣田　栄子
２．発表標題 難聴小児の補聴器と人工内耳による言語発達
３．学会等名 日本耳鼻咽喉科学会埼玉地方部会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大原 重洋，廣田 栄子
２．発表標題 インクルーシブ環境で学ぶ聴覚障害児の聞こえの困難と，無線補聴システムの効果に関する研究．
３．学会等名 第64回日本聴覚医学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 大原 重洋，廣田 栄子
２．発表標題 聴覚障害児の劇遊びにおけるメタプレイが書記ナラティブ産生に及ぼす影響の検討．
３．学会等名 第64回日本音声言語医学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 大原 重洋，廣田 栄子
２．発表標題 インクルーシブ環境にある聴覚障害児の発達課題と，保育所等訪問支援の支援内容の検討．
３．学会等名 日本リハビリテーション連携科学学会　第21回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 中津真美，廣田栄子
２．発表標題 聴覚障害の親をもつ健聴の子ども(CODA)における親子の会話状況と関連する要因の検討
３．学会等名 日本リハビリテーション連携科学学会　第21回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計4件

１．著者名 廣田栄子（編著）	４．発行年 2021年
２．出版社 学苑社	５．総ページ数 286
３．書名 特別支援教育・療育における聴覚障害のある子どもの理解と支援	

１．著者名 廣田栄子	４．発行年 2021年
２．出版社 ヒューマン・プレス	５．総ページ数 168
３．書名 言語聴覚士のアルバムー原点と未来をみつめて　第5章　聴覚障害～小児難聴臨床	

1．著者名 廣田栄子	4．発行年 2021年
2．出版社 独立行政法人　国立特別支援教育総合研究所	5．総ページ数 84
3．書名 難聴児の切れ目のない支援体制構築と更なる支援の推進に向けた研修パッケージ	

1．著者名 廣田栄子	4．発行年 2021年
2．出版社 メディカル・ビュー社	5．総ページ数 432
3．書名 リハビリテーション医学　多職種連携と協働	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大原　重洋 (Ohhara Shigehiro) (90758260)	聖隷クリストファー大学・リハビリテーション学部・教授 (33804)	
研究分担者	中津　真美 (Nakatsu Mami) (90759995)	東京大学・バリアフリー支援室・特任助教 (12601)	
研究分担者	野原　信 (Nohara Akira) (60720836)	帝京平成大学・健康メディカル学部・講師 (32511)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	岡野　由実 (Okano Yumi) (60785393)	群馬パース大学・リハビリテーション学部・講師 (32309)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関